

# 『するが有度山麓9条の会』NEWS

## 積極的平和主義？

駿河区高松在住 安達昌興

8月15日、全国戦没者追悼集会での岸田首相の式辞では「歴史の教訓を深く胸に刻み…」と述べるも何が教訓かは語らず、戦争に対する反省もなかった。首相として初めての式辞だったが、ほとんどが安倍・菅時代と同じ内容だったのは予想されたことはいえなんともしも情けないことだ。一般の国民は政権(首相)が交代すれば「少しは良くなる」くらいの期待は持っているから支持率が上がる。そんなはかない願いも吹き飛ばす、これまで何も変わらぬ岸田首相の式辞だった。変わらない中身の中で注目しなくてはいけないのは、「積極的平和主義の旗のもと」とも述べていることだ。この「積極的平和主義」というのは安倍元首相がこの言葉の持つ本来の意味を捻じ曲げて国際協調路線をうたいながら、北朝鮮・中国を仮想敵国とした日米軍事同盟強化化そのものを推進しようというものであるということだ。戦没者追悼式典で再び戦争の準備を始めると言われたのでは「英霊」たちも気が気ではないだろう。「平和」とつけければ何でもよいことのように聞こえるだろうという詐欺的手法を継承したことは見逃すことはできない。今、目の前で「世界平和統一家庭連合」なるものがこれっぽっちも平和につながるものでないことを知らされている国民はこんな言葉に騙されてはいけな

## 劫火の中になお生命ありて①

明泉寺14世住職 故水谷光子

静岡市が空襲を受けた日、昭和二十年六月二十日午前一時頃、私(18歳)は、母千佐(39歳)、妹喜久代(15歳)、弟威(12歳)と共に、自宅の防空壕に退避していた。空襲警報は連夜のこと、慣れぎみになつてはいたが、それにしても、今夜はなかなか解除にならない。その時、父壽(50歳)は、阿弥陀様をお迎えに本堂へ行つていた。間もなく、お台座から外し、七条のお袈裟をお着せし、お抱きして戻つて来たのだが、その父を待つ間の長かつたこと。不安だつたこと…。

もう一つの気掛かりは、祖父了故(79歳)であった。この時、祖父は奥座敷の布団の中だつた。老衰に加えて、リウマチで関節を痛めているため、いつも壕に入ることを拒むのであつた。親戚や知人からの疎開の招きにも、感謝はしながらも、固く辞退するばかりだつた。多分、遠からざる死を覚悟の上で、どうしても、寺から離れられなかつたのであろう。廃佛棄釋の時代にあつて、荒廃した明泉寺を引き受け、坊守真(昭和十四年68歳で逝去)と共に、必死で寺を守り、檀信徒の皆様のお力を得て、あの立派な本堂を再建できたのは、祖父の四十代後半の筈である。勿論、家族の足手まといになるつもりなどは全く無く、時が来たら、自室で静かに最期を迎えるつもりだつたのであろう。私も年を重ねた今、祖父のそんな気持ち、切ない程によく判るが、当時は、『家族の身にもなつて欲しいのに…』という思いがあつた。しかし、決して誰も口には出さなかつた。目上に対する当然の遠慮であり、そういう時代だつたのである。



静岡大空襲

父が戻つてから暫く経つた。辺りのざわめきもいつしか鎮まり、何となく不気味な気配だつた。今にして思えば、先のざわめきは、近所の方たちが家を捨て、安倍川方向などに逃げていく騒音だつたようである。弟の主張で壕の入り口をそつと開け、外に出てみたらさあ大変。表の道路の向こう側に、火の手が上がっているではないか。茫然として一瞬立ちすくんだが、その間にも、火はこちらへ燃え広がってくる。もうこうしてはいられない。父の意見で、墓地を通り抜け、裏の道路から逃げることにした。母は祖父をお迎えに奥座敷へ走つた。

我が家の防空壕は庭の一隅で、本堂からも庫裡からも、かなり離れた場所であり、金木犀の大木や榎・椿・山茶花などの植え込みに隠れ、上空からは全くそれと判らぬように作つてあつた。排水もよく考えてあつたし、壁替わりとして土止めを畳を使うなど、当時としてはかなりよく出来ていた。勿論、父が考えに考えて、職人に作らせたものであつた。この壕一つにも、父の生きる姿勢がよく表れている。結果的には、壕に頼り過ぎて逃げる機会を失つたのであるが、父としては、真に止むをえぬ事情であつたと思う。一つには祖父である。祖父を置き去りにして、逃げ出せる筈がない。連れ出すとしても、本人が状況の理解もできず承知もしない。そして無理に動かしても痛みを耐えられないだろう。二つには、父の体力である。心臓弁膜症が進んでいて、人並みに走られる状態ではなかつたし、視力も衰えていて、当時は新聞の記事は全く読めず、見出しが読めたり読めなかつたりの状態だつた。明暗はよく判り、家の中の生活に困らない程度ではあつたが、外出には母などの付き添いが必要だつたのである。三つにはご本尊様のことである。他のお掛軸などは疎開したが、阿弥陀様だけは、父が自分の命に懸けて、お給仕するつもりで、疎開は全く考えなかつたようだつた。そのことも、逃げる機会を失つた原因だつたと思う。それにしても、静岡市の空襲は、殆ど初めてのようなもので、新聞に報道されない程度の空襲はあつたが、一般には知らされず、父も知らなかつたようであつた。その頃は、新聞・ラジオなどの報道は極度に規制され、戦局のニュースなど、軍にとつて都合の悪い事は皆伏せられ、国民はかなり不安を感じつつも、口にさえ出せない時代だつたから、父の時局の認識が、少し甘かつたかも知れないが、仕方ないことと思う。ともあれ『阿弥陀様は、室息の心配がないから、壕の中の方が安全だろう』と、父は判断した。私達にも各自の貴重品は残させて、壕の入り口を完全に閉ざし、全員身一つで飛び出したのであつた。(つづく)